
まだ、雨はやまなくて。

海田 陽介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まだ、雨はやまなくて。

【Zコード】

Z7815C

【作者名】

海田 陽介

【あらすじ】

大学を卒業してから植栽関係の会社で働いているわたしは、買い物をした帰りにばったり大学時代の友人と再会する。そしてその友達のうちに遊びに行つて色々思い出話をしているうちに、ふと会話は最近別れたばかりの恋人の話になって・・・。二十代後半にさしかかるうとしている男女の何気ない日常や思いや希望といったことが、この小説のテーマです。

優しい夜と孤独

ふいに、何かが頬を濡らした。

最初それは自分の涙だと思ったのだけれど、でも、それは違つて、雨だった。

とうとう降り始めたんだ、と、わたしは思った。雨が。

わたしは歩みを止めると、空を見上げてみた。
空には灰色の絵の具を水に溶かして薄めたような雲が広がっている。

わたしは右手を宙に差し出して手のひらを表に向け、その舞い落ちてくる小さな水の粒を受けてみた。

すると、手のひらに、雨粒の、哀しいような冷たさが、とても静かに広がつていった。

「わかちゃんがうちに来たのってめっちゃ久しぶりやね。
と、かよちゃんは楽しそうに微笑んで言った。

「そういえばそうやなあ。」

と、わたしも微笑みながら、フローリングの床の上に腰を下ろした。

実際に、彼女の家に遊びに来たのは随分と久しぶりのことだった。

最後に来たのはいつだろ?と考へて、よく思い出せなかつた。たぶんもう三ヶ月以上前のことだ。社会人になつて働くようになつてから、学生のときの友達と遊ぶ機会はめっきり少なくなつてしまつた。

仕事が忙しくてなかなか時間の都合がつかないということもあつたけれど、でもそれ以上に、みんなそれぞれ生活の基盤となる場所が変わつてしまつたような気がする。何か特別なことでもない限り、みんなで集まることはなくなつてしまつた。今日かよちゃんの家に遊びに来ることになつたのも、べつに前もつて約束をしていたわけではなくて、買い物をした帰りに、街でばったり彼女と顔を会わせたからだつた。

かよちゃんは自分の荷物を置くと、とりあえずといつ感じでテレビをつけた。すると、部屋のなかに賑やかな笑い声が溢れた。なんとなくテレビの方に視線を向けてみると、今テレビではバラエティ番組がやつていて、見たことのないお笑い芸人が何かコントのようなことをやつていた。テレビのなかの観客がどつと楽しそうな笑い声をあげて、その笑い声を聞いていると、よくわからないけれど、ほつとくつろいだ気持ちになれた。

「わかちゃん何か飲む？」

と、少し経つてから、かよちゃんがふと気がついたよつて言つた。
「いいで。そんな気をつかわんでも。」と、わたしは答えたけれど、彼女はそんなわたしの言葉を聞き流して、それまで座つていたフローリングの床から立ち上がると、玄関と一体化しているキッチンの方まで歩いていった。

そしてそこで立ち止まつて、わたしの方を振り返ると、
「紅茶とコーヒーやつたらどうちがいい？」
と、訊いてきた。

わたしは少し迷つてから、「じゃ、コーヒーで。」と、答えた。
かよちゃんは、「了解。」と言つて微笑むと、コーヒーメーカーを準備して、コーヒーを入れる準備をはじめた。

しばらくすると、コーヒーメーカーから蒸気の吹き出る音が聞こえてきて、そのあとにガラスビンに抽出されたコーヒーの溜まつていぐ音と、コーヒーのいに香りがふんわりと漂ってきた。

わたしは彼女がコーヒーを入れてくれている間、べつに意味もなぐぐるりと彼女の部屋を見回してみた。

かよちゃんが一人暮らしをしている部屋は、全体的に白で統一されたシンプルな部屋だ。六畳もないくらい部屋なのに、空間の使い方が上手なせいで、あまり窮屈な感じを受けない。ほぼ正方形に近い形をした部屋の右隅にベッドがあつて、その反対側にはスチールラックがある。ラックには、テレビとかコンポとか雑誌とか絵本とか、その他細々としたものが綺麗に整頓されて並べられている。ラックとベッドの中間くらいのスペースに、白くて丸いデザインのかわいらしげテーブルがひとつ置いてある。ベッドの後ろには鏡台があつて、その反対側にはタンスがある。化粧台とタンスの向こう側はベランダになつていて、そのベランダの前には無地で白のカーテンがかかっている。

突然のわたしの訪問にもかかわらず、彼女の部屋は綺麗に片付けられていて、わたしの部屋とは大違ひだな、と、わたしは感心してしまった。

「できたよ。」と、言つて、やがてかよちゃんがコーヒーの入ったマグカップをふたつ持つて戻ってきた。マグカップは赤と黄色の可愛い感じのもので、そのマグカップのふちの内側には、フランス語

で、こんなのは、楽しいひとときをどうぞ、とこうよつたことが書かれてあった。

「砂糖とかミルクとかいる?」と、かよちゃんはテーブルの上にマグカップを置くと言つた。「あ、大丈夫。」と、わたしは微笑んで答えると、そのまま「コーヒーを一口啜つた。かよちゃんも何も入らずに口に含んだ。

かよちゃんのいれてくれた「コーヒーは濃くがあつて、すごく美味しかつた。わたしがそう言うと、彼女は少し嬉しそうに笑つて、「この「コーヒー豆、スターバックスで買つてきたやつやねん。」と、いくらか得意そつに教えてくれた。

わたしとがよちゃんは少しの間テレビを見るともなく見ながら無言で「コーヒーを啜つた。しばらくするとテレビ画面を眺めていたかよちゃんが、「あのひと、誰かに似てるなあって思つたら、太陽に似てるなあ。」と、可笑しそうに笑いながら言つた。

彼女に言われて今テレビに映つているその若いお笑い芸人のひとの顔をよく見てみると、なるほど、彼女のいつとおり、そのひとは学生時代の友人である太陽にそっくりだつた。

「ほんまや。」と、わたしが笑いながら頷くと、かよちゃんもつられるように少し笑つて、「あれもしかしてほんまに太陽なんちゃう?」と、冗談で言つた。

「太陽いつの間に転職したん?」と、わたしも楽しくなつてきて言った。

「だけど、最近太陽どうしてるんやろ。」

と、かよちゃんはちよつと真面目な表情に戻つて言った。

「わかちゃん、最近太陽にあつた？」

と、かよちゃんはわたしの方を振り向くと訊いてきた。

「ううん、全然会ってへん。」と、わたしは小さく首を振つて答えた。

太陽に最後に会つたのはいつだらうと考へてゐるうちに、急に太陽のことが懐かしくなってきた。学生の頃はほとんど毎日のように会つていたのに、最近では滅多に会えなくなつてしまつた。太陽や他のみんなに最後に会つたのは、もう二ヶ月以上前のことだつた。そう思つと、急に何だか少し寂しいような気持ちになつた。

「太陽、あれから新しい仕事先見つかったんかなあ」

と、かよちゃんはコーヒーを一口啜つてから言つた。

「さあ、どうなんやる。」と、わたしは曖昧に返事を返した。

太陽は大学を卒業したあと小さな建築事務所に就職して働いていたのだけれど、最近、その会社を辞めて無職になつていた。太陽の話では、会社の経営状態が思わしくなくて、辞めてもらえないかと社長に頼まれたのだといつことだつた。

「でも、しばらくはゆっくりするつて言つてたから、まだ何もしてないんぢやう？」

と、わたしは少し考へてから言つた。「働いてるときは休みがなくて、自分のしたい」と何もできひんかったから、しばらくはゆっくつしたいみたいこと言つてた気がする。」

「そつかー。」と、かよちゃんはわたしの言葉に頷くと、少しの間黙つて何か思いを巡らせている様子だつたけれど、やがて、「だけど、うちらもう二十五になるんやね。信じられへんわ。」と、しみじみとした口調で言つた。

「そうやね。」と、わたしは苦笑するように微笑にして頷いた。

「高校生ぐらいの頃は、自分が二十五歳になるなんて想像することすらできなかつた。でも実際になつてみると、案外あつけないものだつた。ちょっとあつけなさすぎるくらいだつた。年齢だけが、どんどん勝手に一人歩きをしていくという感じがあつた。ほんの昨日まで十九とか二十歳だったのに、ある日突然、はい、じゃあ明日から二十五歳です、と言われたよつた、そんな唐突で理不尽な感じすらあつた。

「……」の前な、高校のときの友達の結婚式があつてん。」

と、かよぢやんは少し経つてから、ふと思いついたように言つた。「……女の子の友達なんやけどな、その子、高校のときの同級生の子と結婚してん。それでな……」

と、かよぢやんはそこまで口にしてから、ちょっと躊躇うに、何かを確認するように、わたしの顔をちらりと振り返つた。そして一呼吸ふんぐりい間をあけてから言葉を続けた。

「それでな、結婚式には他にも高校のときの同級生の子が一杯きててな・・それでそのなかに、わたしが高校のとき片思いしてた子もおつてん。」

彼女はそう言つてから、少し恥ずかしそうに小さく笑つた。

「べつに今はなんとも思つてないで・・けどな、ちょっとその当時のことを思い出してな・・なんかよくわからへんねんけど、めつちや切なくなつてしまつた。」

「そんなことがあつたんや。」と、わたしは曖昧に微笑して頷いた。そして頷きながら、わたしにも高校のとき似たようなことがあつたな、と、懐かしさと切なさが入り混じつたよつた複雑な気持ちになつた。

高校生のとき、わたしにはひとつ年上の好きなひとがいた。でも、そのひとにはもう恋人いて、わたしの気持ちは届かないままに終わってしまった。そのひとは今頃どうしているのだろう、となんどな
く思つた。ひょっとすると、かよちゃんの友達と同じように、もう結婚していたりするのかもしれない。

「せっかく再会したんやから、思い切つて声かけてみたら良かつた
のに。」

と、わたしは冗談めかして言つてみた。「今度ふたりで遊ぶ約束
するとか。」

すると、かよちゃんは、「そんなの無理やわ。」と、恥ずかしそう
に笑つて、「それにその子、彼女おるつて言つてたし。」と、続け
て言つて微笑した。

「そつか。それは残念やな。」

と、わたしもかよちゃんの笑顔に誘われるようにして微笑して、コ
ーヒーを一口啜つた。

それから、僅かな沈黙ができる、その沈黙なかにテレビの音がく
つきりと浮かびあがつた。すぐタイムリーなことに、テレビでは
結婚式場の「マーシャル流れ」ていた。

「・・・わかちゃんはもう大丈夫なん?」

と、いくらかの沈黙のあとで、かよちゃんはわたしの方を振り向
くと、ちょっと遠慮がちな声で言つた。

わたしがなんのことだろ?と思つて彼女の言葉の続きを待つてい
ると、彼女は、

「・・・加藤くんのこと、もう大丈夫なんかなあつと思つてな。
と、少し小さな声で言つた。

わたしが呟嗟のことに何も言葉を発せられずこるど、かよひちゃんは更に言葉を継いだ。

「・・・もし、嫌なこと思に出れてしまつたんやつたらめりやがめんな。でも、わかちゃん、別れたばっかりのときは「へ落ち込んでたし・・・あれから少しさ落ち着いたんかなつて思つて。」

「うん、もう大丈夫やで。」と、わたしはかよひちゃんの言葉にこぐらか無理に微笑んで答えた。「・・・別れたばっかりのときは、長い付き合いやつたし、すぐ落ち込んでしまつたけど、もう大丈夫。そんなに思い出したりしんくなつてきた。」

「・・・やつか。それやつたらいいんやけど。」と、かよひちゃんはちよつとの間心配そうにわたしの顔を見つめていたけれど、やがて頷いた。そして少し間を空けてから、「でも、何か話したいこととかあつたらいつでも言つてな。」と、付け加えるように言つた。「何もしてあげられへんけど、話聞くじどうやつたらできると聞ひし・・。」

「・・・ありがとや。」と、わたしは言つた。でも、やつはわたしの言葉は、こぐらかぎいちぢなく部屋の空気を震わせてこつた。

わたしは今から三ヶ月程前に、約四年半付き合つた恋人と別れた。そのひととは結婚するつもりでいて、実際に婚約までしていて、お互いの親にはもう挨拶をすませて、あとは結婚式をあげるだけというところまでいっていた。ふたりで結婚式はどんなふうにしたいとか、そういう話し合ひをしていて・・そういう話し合ひをしているのはすごく楽しくて・・でも、それなのに、些細な考え方の違いから喧嘩になつて、言い合ひになつて、最後には、ふたりの関係は完全に壊れてしまつた。

・・・どうしてそんなことになってしまったのだろうと思つ。でも、たぶん、わたしが悪かったのだ。今なら少しさは冷静に自分間違いを認めることができる。たぶん、わたしは彼の愛情に甘え過ぎてしまっていたのだ。

ちょっとぐらい我が儘を言つても、彼はわたしの意見を全部受け入れてくれると思い込んでいた。でも、そのときの彼はいつも違つて、わたしの考えを、わたしの我が儘を、なかなか受け入れてくれようとはしなかつた。

そして、わたしは自分の我が儘を受け入れてくれない彼に対して、腹を立てた。

でも、ほんとうはそんなことはすべきじゃなかつたのだ。わたしの方が彼に謝らなければならなかつた。そんなことはちょっと考えればわかりそうなものに、でもそのときのわたしはすこしく興奮していて、自分のことばかり考えてしまつていて、そのことに気がつくことができなかつた。そして気がついたときには、もう、わたしは彼を失つてしまつていた。

・・・わたしはまだ彼のことが好きだし、できることならもう一度やり直したいと思うけれど・・でも、それは不可能なことだ。あんなひどいことを言つてしまつたのだから・・今更彼が許してくれるはずがない・・たから、諦めるしかない・・それはわかっているのだけれど・・わかっているはなんだけれど・・わたしの思考は同じところをグルグル回る。でも、出口は見つからない。

「・・・元気だしてな。」と、わたしが黙つていると、わたしに気を使ったのか、かよちゃんは優しい声でそう言つてくれた。わたし

はありがとうございましたと答えたけれど、そう答えたわたしの声は、彼女の言葉が嬉しかったのと、彼のことを思い出して悲しくなってしまったのとで、泣き笑いのような変な声になってしまった。

そのわたしの声を聞いてかよちやんは少し可笑しそうに口元を綻ばせると、それからすぐに優しい笑顔で、「わかちやんにはまだすぐにはじいひと見つかるつて。」と、明るい声で慰めてくれた。

「ありがとう。」と、これで何回田になるともなくわたしは彼女にお礼を言った。

「かよちやんにもすぐにいじいひと見つかるで。」と、わたしがお返しのようになつぱりと、かよちやんは軽く笑つて、「そうなつてほしいもんやわ。」と、おどけて答えた。

かよちやんも一年くらい前に付き合っていたひとと別れてからずっとひとりでいるみたいだつた。

「・・・お互いかなか上手くいかへんもんやな。」

と、わたしは少し間隔をあけてから苦笑まじりに言った。すると、かよちやんもつられるようにして小さく笑つて、そうやね、と、頷いた。

また沈黙ができる、テレビの音がやわからくその沈黙の輪郭を縁取つていつた。ふと部屋の時計に目をやつてみると、いつの間にか、時刻は夜の九時半を回るつとしていた。

「かよちやんは明日仕事?」

と、わたしはかよちやんの横顔に視線を向けてからなんとなく尋ねてみた。すると、かよちやんは口についていたマグカップをテープルの上に戻してから、「うん。」と、短く頷いた。

「明日は九時から仕事やね。」と、彼女はちょっと憂鬱そうに眉をしかめて言った。かよちゃんは大学を卒業したあとアロマテラピー関連の会社に就職したのだけれど、人間関係のごたごたとか色々あってその会社を辞めて、今はアルバイトで入った花屋さんで契約社員という形で働いていた。

「わかちゃんも明日は仕事？」

と、かよちゃんはわたしの方を振り返つてそう尋ね返してきた。

わたしは彼女の言葉にうん、と頷いてしまってから、急に明日働くことが億劫になつてきた。わたしは大学を卒業してから、植栽関係の会社で働いている。わたしの働いている会社はまだ比較的きちんと土日休みがもらえる方ではあるけれど、それでも毎日のように残業になつてしまつし、義務とか目標とか、そういうことに追われて、ときどきびくびくしてしまつことがあつた。

「・・・もうとゆつくり時間があつたらいいんやけどなあ。」

と、わたしが冗談まじりに言つと、かよちゃんは軽く微笑して、そうやね、と頷いた。そしてそれから、「もしゆつくり時間があつたら、またみんなでどつか旅行に行きたいよな。」と、静かな口調で言つた。

「そうやね。」と、わたしは曖昧に微笑して頷きながら、でもきっとそんなふつにゆつくりできる時間は、これから先どうぶん来ないんだろうな、と、諦めるように思つた。そしてそう思つことは、何がどうといふこともなく、少し、寂しいような気がした。

わたしの「れから」

・・・とれども、ふと、何の脈略もなく、寂しくなつてしまつ」とがある。

まるで道を歩いていたら、突然落とし穴に落ちてしまったみたいに。そしてその寂しさは、決して大げさな言い方とかではなく、両腕で自分の身体を抱きしめて蹲つていなければ耐えられないような、凍えるような、極端に激しいものだったりする。

何がそんなに寂しいのか、自分でもよくわからない。長く付き合ったひとを失ってしまったということが、少しは関係しているのかかもしれないけれど、でもそれだけが原因じゃなくて、何かもつとべつの、たとえばわたしの存在そのものに起因するよつ何かが、その寂しさと深く関係しているよつな気がする。

・・・でも、ほんとうは、寂しい、と思つてしまつ感情なんて、笑い飛ばしてしまえたらしいのだけれど。寂しいなんていう感情は、結局のところ、たぶん、わたしが甘えているから、そう感じてしまうのだろうから。

・・・寂しいなんて思つてこる暇があつたら、もっと少しでも、何か自分のためになるようなこと、あるいは誰かのために何かできることをすべきなのだ。・・・でも、そつわかついても、どうすることもできない。

まるで突然の雨降りみたいに、ポツリと舞い落ちてきた寂しさの雲は、あつという間に土砂降りの雨みたいになつて、みるみるうちにわたしの心の表面を寂しさで濡らしていく。そして一度降り出しき

た雨は、梅雨の雨みたいに長く降り続いてなかなか止まない。止んだとしてもまたすぐに降り出してしまつ。わたしの心はいつまでもその寂しさに捕らわれてしまつ。

朝起きると、まず洗面所で歯を磨いて顔を洗つ。そして部屋の力ーテンを空けて、それからベランダで育てている朝顔に水をあげる。

わたしはほんの数日前からベランダで朝顔を育てはじめた。

朝顔は土のなかから芽を出したばかりで、まだほんの小さな生命の欠片に過ぎない。この生命の欠片が成長してやがて綺麗な花を咲かせるのは、当分先のことだ。・・・一体何色の花が咲くのだろう。赤だろうか、それとも黄色、もしくは青、花が咲くのはまだまだ先のことなのに、今から花が咲いたときのことを想ひ出すとすべく楽しみだつた。

わたしが朝顔を育ててみようと思つたのはほんの思いつきからだつた。小学校のとき、朝顔を栽培する授業があつて、そのとき、ほかのみんなの鉢植えには色とりどりの綺麗な花が咲いたのに、自分の鉢植えにだけは何の花も咲かなかつた。そのときのことをなぜか急に思い出して、それでふと育ててみよつと思つて立つたのだ。

黄色のジョウロに少し水を入れてベランダに出ると、どんよりと曇つた暗い空が見えた。この調子で行くと、今日のお昼頃には雨が降るのかもしない。

まだ生まれたての朝顔の芽に、そつとやさしく、大切な友達に話しかけるように、ふんわりと水をかけてあげる。すると、頭から水を浴びた彼女は、わたしの顔を見つめて、ありがとうと嬉しそうに微笑んでいるようにも思えた。

朝顔に水をあげたあとは、朝食を作る。といつても時間もないし、面倒でもあるので、いつも大抵トーストを一枚焼くだけだつたりする。

トースターで軽く焦げ目がつく程度に焼き上げると、それにバターだけを塗つて食べる。ときどきジャムや蜂蜜をかけて食べたりもする。それと一緒にコーヒーか紅茶をつけるのだけれど、今日は曇っているから何となく紅茶が飲みたい気分で、ミルクティーにすることにした。赤い薬缶に少し水を入れて、電気コンロでお湯を沸かす。お湯が沸いたら、マグカップにその沸いたお湯を注いで、その後にティーバックの紅茶を入れる。今日はこの前買つた桃の香りのする紅茶があつあつだったのでそれにしても、そのティーバックをちょっと長めにお湯につけておいたあとに、ポーションミルクをひとつ入れる。

朝食をすませると、パジャマから服に着替えて、化粧をして、仕事に出かける。

わたしがひとり暮らしをしているアパートから駅までは徒歩で十分くらいの距離で、その駅から電車で三十分ほどいったところに、わたしの働いている小さな会社はある。

その会社は、植物を育てて、その育てた植物を花屋さんとか、他の植物を扱うお店に卸したり、庭のデザインとかをしたりする会社だ。小さな会社だから、まだ若くて経験のないわたしにも大きな仕事を任せてくれるし、それなりにやりがいもあって楽しかったりもするのだけれど、でもそのぶん大変だったり、体力的に辛かつたりもして、今の仕事に満足しているような、していないような、よくわからない気持ちになってしまつ。

でも、一番問題なのは、わたしがどうしてもこの仕事がやりたいと思っているわけではないということだ。とりあえず今はいいとしても、わたしはこの仕事をずっと続けて一体どうするのだろう、どうしたいのだろう、と、ときどき自分のなかにそんな疑問の声が浮かんできてしまつ。かといって、今働いている会社を辞めてどうしたいというような具体的な目標もなくて、やつてみたいなど思つことはあってもそれは漠然としていて、そのためには積極的に努力していくことが、計画を立ててどうこうとこころまではなかなか気持ちが向かわなかつたりする。・・・将来のことを考えると、やらかな行き止まりにぶつかつてしまつたような、苦しいような、不安のようなそんな気持ちになつてしまつ。

朝会社に着くと、とりあえずパソコンをつけてメールをチェックする。そしてそのあとは見積もり書の作成をやって、そのついで伝表の整理や、書類の作成を途中までやつてしまつ。そのあとはちょっとした会議というか、打ち合わせみたいなことがあって、それが終わつたら今度は植物を育てている現場に行つて植物の世話をする仕事がある。

そういう一連の仕事が終わるのはだいたいいつも夕方の六時過ぎで、そのあとはまた会社に戻つて、今度は次の仕事のための

準備や、わたしが担当することになつてているホームページの更新の仕事や、次の会議のための書類の作成や、計画表の作成等があつたりして、全部の仕事が終わつて家に帰るのはだいたい十時を過ぎることが多い。

いくら残業をたくさんやつても、ある一定量、ぶんの手当でしかつかないから、ほとんどただ働きのような状態で、みんな帰つて誰もいなくなつた会社にひとり残つて仕事をしていると、ときどきわたしはこんなところでひとりで一体何をやつているのだろう、と、泣き出したいような哀しい気持ちになつてしまつことがある。

お昼を過ぎると、思つていた通り雨が降り始めた。それは激しくも降らなければ弱くも降らない、冷たい雨だった。

太陽から携帯に電話がかかってきたのは、わたしが仕事を終えて帰る仕度をしているときだつた。今近くに池ちゃんと一緒にいるのだけど、もし良かつたらわたしも来ないか、という誘いの電話だつた。池ちゃんというのは、わたしが大学のときに太陽を通じて知り合つた同じ年の男友達だ。

わたしはその太陽の誘いを聞いてどうしようかなと思つた。何しろ今日は朝から仕事で疲れていたし、明日は明日で朝から仕事あるからだつた。でも、少し悩んだ末に結局行くことに決めた。太陽と池ちゃんのふたりとはもう長いこと会つていなかつたし、この機会を逃してしまつたら、また次に会えるのはいつになるかわらからな

いと思つた。

明日は朝から仕事があるけれど、でもその明日を乗り越えれば、次の日が休みでもあつたので、まあなんとかなるだろうと判断した。それに、今日という一日が、仕事をするだけで終わつてしまつといのは、何だか虚しいような気もした。

雨のなかを透明のビニール傘をさして駅の方まで歩いていく。すると、駅前のバスのロータリー付近に、太陽の（正確には太陽のお母さんの）車である、ワインレッドのミニカーが停まつてゐるのが見えてきた。

車のすぐ側まで近づくと、運転席の窓が開いて、「久しぶりやな」と、太陽の明るい声が聞こえた。わたしが、「ひさしひり。」と、答えると、続けて助手席の方から池ちゃんの声も聞こえてきた。

「今日はふたりで遊んでたん？」と、わたしが訊いてみると、太陽は、そうやねん、と、頷いてから、「池ちゃんが寂しい、寂しいって言つからやあ。」と、笑いながら答えた。すると、助手席に座つた池ちゃんが、「そんなこと言つてへんやん。」と、ちょっと口を尖らせて答えた。「暇やからつて誘つてきたのは自分やろ。」と、池ちゃんは太陽を非難した。すると、太陽は軽く笑つて、「え？そうやつたけ。」と、とぼけていた。

わたしはそんなふたりのやりとりを聞きながら、微笑ましいような、懐かしいような気持ちになつた。

そのあと、わたしたちは太陽の運転する車に乗つて、近くのファミリーレストランに向かつた。席に着くと、太陽と池ちゃんのふたりはハンバーグとライスとドリクバーのセットを注文した。わたし

はちよつと迷つてから、みんなと同じドリンクバーと、なすとじつ
くり煮込んだミートのパスタを注文した。

店員さんがいなくなると、わたしたちはそれぞれドリンクバーに飲み物を汲みにいった。そしてその汲んできた飲み物を飲みながらとりとめもなく話をした。それぞれが覚えているような覚えていないような思い出話しから、最近見た映画のことや、近頃やつと暖かくなってきたねというような季節の話・・・ふたりと話すのはほんとうに久しぶりだったから話題が尽きたことはなかつた。そしてそんなふうに話をしていくうちに、ふと話題は太陽の会社を辞めた話になつた。太陽はまだ無職でいるみたいだつた。

「まだ当分就職するつもりはないの？」

と、わたしが訊くと、太陽はいくらか困つたように顔をしかめて、「いや、いい加減働かんとヤバいな。」と、苦笑しながら言つた。「今は実家やからいいけど、ずっとこのままっていうのもな。」

「じゃあ、次もやっぱり建築関係で探すの？」

と、わたしが続けて尋ねると、太陽はいくらか思案気味な表情を浮かべて、

「そうやな。たぶん。」と、答えた。「デザインにもちよつと興味あるけど、でも大学でせつかく建築のこと学んだんやし、できればやっぱ建築関係の仕事がしたいよな。」

と、太陽は答えた。

「でも、もし、建築関係の仕事が見つかんかつたらどうするん?..」
と、池ちゃんが横から口を挟んだ。

「見つかんかつたら・・・。」と、太陽は池ちゃんの質問に考え込むよつた表情を浮かべると、少ししてから、「どうあるんやんな。」
と、誤魔化すよつて曖昧に笑つて答えた。

「・・・やうじつのつて、なかなか自分の思い通りにいかへんもん
やよな。」

と、池ちゃんは太陽のとなりで半ばひとごとのつまごくから小さな声で言つた。

「池ちゃんは最近どうなの？」

と、わたしは池ちゃんの顔に改めて視線を向けてみた。

すると、池ちゃんは「一ラをストローで一口啜つてから、「なかなかやな。」と、少し沈んだ口調で答えた。

池ちゃんは大学を卒業したあと、フリーターをやつながら、公務員になるための勉強を続けていた。

「筆記試験はいけるんやけど、面接で、どうしてもな・・・。」

「・・・そつか。」と、わたしはなんて言つたらいいのかわからなくてただ相槌を打つた。

「やつぱり難しいんやね・・・。」

「・・・俺、そろそろ諦めようかなって思つてんねん。」と、池ちゃんは少ししてから躊躇いがちに言つた。「・・・もう一十五やしない、早よせんと、就職する」とすりできひんくなつてしまつやしない・・・。」

「・・・そつか。」と、わたしは池ちゃんの言葉にただ頷くことしかできなかつた。太陽も適当な言葉が見つからないのか、黙つていた。

ふと、となりの窓ガラスの外に景色に目を向けてみると、そこには横断歩道が見えた。その横断歩道の信号は、いま青信号から赤信号に変わろうとしているところだつた。なんとなく、その点滅する青信号は、まるでわたしたけのこれからを暗示しているよつとも思えてきた。

「・・・だけど、実際、現実は厳しいよな。」

と、しばらくの沈黙のあとで太陽は静かな口調で言つた。わたし

は窓の外に向けていた視線を太陽の顔に戻した。

太陽は洋服の胸ポケットからクシャクシャになつたタバコの箱とライターを取り出すと、そのタバコの箱からタバコを一本取り出して口にくわえた。

「・・・高校くらいのときは、今自分がこんぶつになつてるとは思つてへんかったもんな。」と、太陽は苦笑しながらそう言つと、口にくわえていたタバコに思い出したようにライターで火をつけた。「よくわからへんけど、二十五歳の自分はもつとすごくなつてるつて漠然と思つてたな。」と、太陽は自嘲氣味に微笑しながら言つた。「建築家になるのは無理でも、もうちょっとといけてると思ってたんやけどどな。」太陽はそう言つてから、タバコの煙を吐き出すと、首を傾げるようにして少し笑つた。

「でも、確かにそのくらいの頃は今と違つてもつと根拠のない自信つてあつたよな。」

と、池ちゃんは太陽の台詞にゆづくつとした口調で同意した。「俺は高校んときはプロのギターリストになれるつて本氣で思つてたな。」

と、池ちゃんはそう言つてから、苦笑するよつて軽く口元を綻ばせた。

「今からでも頑張つてみたら?」

と、わたしが適当なことを言つと、池ちゃんは軽く首を振つて、「いや、無理やつて。俺よりもギターの上手いやつなんていぐらでもおるもん。」

と、答えた。

「そつか。」と、わたしは頷いた。

太陽は何も言わずに、黙つてタバコを吸つていた。

少しの沈黙がきて、その沈黙から音が溢れ出すよつとして、周

団の物音がやけにくつきりと聞こえてきた。わたしたちが座つてい
る後の席には大学生くらいの男女の集団がいて、何か面白いこと
もあつたのか、そのひとたちが急にどつと楽しそうな笑い声をあげ
るのが聞こえた。

「・・・そういえば、吉田は今頃どうしてるんやろ？」

と、しばらくしてから、太陽がふと思いついたように言った。

「そりいえばなにしてるんやろ？」

と、池ちゃんはぼんやりとした口調で太陽の言葉に同調した。

吉田くんというのは、わたしたちが大学のときにサークルで知り
合つた同じ年の男友達だ。彼の将来の夢は小説家になることで、彼
は大学を卒業したあと東京に出て、そこでアルバイトをしながら小
説を書いていた。わたしはせっかく親しくなった友人と離れ離れにな
つてしまつのが嫌で、小説を書くのはべつに東京じゃなくてもで
きるんじゃないかと思って、彼にそう言つたのだけれど、彼は一度
環境を変えてやってみたいという気持ちがあるし、それに東京には
出版社もたくさん集まつてゐるからと言つて、結局、住み慣れた大阪
を離れて東京にいつてしまつた。吉田くんに会つたのは、去年かよ
ちゃんとふたりで東京に遊びにいつたときが最後だった。今頃何を
しているんだろうな、と、急に吉田くんのことが懐かしくなつた。

「小説家にはなれそうなんかな。」

と、池ちゃんが誰に向かつて言つてもなく言つた。

「一応、去年は小さな公募で賞取つたつて言つてたけどな。」

と、太陽はタバコの火を灰皿で押しつぶすようにして消しながら
言つた。

「それから何か進展はあつたんかな。」

「・・・やっぱ色々難しいんぢやう？」

と、太陽はいくらか気遣わしげな口調で言つた。

「そうやろな。」と、池ちゃんは太陽の言葉に考へ込むよう表情を

浮かべた。

「ねえ、今から吉田くんに電話しみいひん？」

と、わたしはふと思いついて言つた。

「それいいな。」

と、太陽はわたしの提案にいくらか声を弾ませて言つた。

「してみようや。」と、池ちゃんも微笑んで言つた。

わたしはカバンのなかからケータイを取り出すると、吉田くんの電話番号を呼び出して通話ボタンを押した。すると、少しの間があつて、呼び出し音が鳴りはじめた。呼び出し音が鳴り出したとたん、わたしはちょっと緊張した。彼が電話に出たらなんて言おうと、わたしは慌てて頭のなかにいくつかの台詞を準備した。久しぶり。元気？今何してるの？今、太陽と池ちゃんと一緒におんなんやけどな・。・。

でも、いくら待つても電話は繋がらなかつた。吉田くんは電話に出なかつた。

「つながらへんの？」

と、太陽がわたしの顔を見て言つた。わたしはケータイを耳にあてたまま頷いてみせた。

「バイト中なんぢやう？」

と、池ちゃんは言つた。

だいたい十回目くらいの呼び出し音が鳴つたところで、わたしは諦めて電話を切つた。

「でも、今もう十一時ちよつと過ぎてるで。」

と、太陽は自分のケータイの画面を見つめながら納得できぬよう言つた。

「深夜のバイトやつてるのかもしけんやん。・・もししくは寝てるかやな。」

と、池ちゃんは太陽の言葉にちよつと考へてから答えた。

「またあとでかけ直してくるや。」

と、池ちゃんはなんでもさそつと言つた。

「わうやな。」と、太陽は池ちゃんの言葉に頷いたけれど、なんとなく吉田くんが電話に出なかつたことが気になる様子で、もう一度何かを確認するようにケータイの画面に視線を落としていた。

わたしも氣になつてもう一度ケータイの画面を確かめてみた。ひょっとしたら今この瞬間に彼が電話をかけ直してくるんじやないかと思つたけれど、でも、ケータイは鳴らないままだつた。・・・なんとなく、彼と、吉田くんと電話が繋がらなかつたことが、気になつた。吉田くんはほんとうに池ちゃんの言つとおり今寝ているのだろうかと思つた。ひょっとして彼に何かあつたんじやないかと、わたしはよくわからないままで不安な気持ちになつた。

程なくして、わたしたちが注文した料理は運ばれてきた。料理は不味くない代わりに美味しくもなかつた。わたしたちはどちらかといつと口数少なく料理を食べて、食べ終わるとすぐに店を出た。

店を出ると、時刻は夜の一時を少し回つてしまつていった。雨はまだ静かに降り続いていて、街灯の白っぽい光が、その冷たいいつくもの雨粒を夜の暗闇のなかに淡く浮き上がりさせていた。もう季節は四月の半ばだとこいつに、すじく肌寒くて、春なのに、まるで冬のはじめみたいな、と、わたしは思つた。

わたしたちが思つ」」

「わからんは明日仕事なん?」

太陽がそう口を開いたのは、車で池ちゃんを家まで送り届けあとしばらく経つてからのことだつた。太陽とわたしの家は結構近いのだけれど、池ちゃんの家は少し離れた場所にあって、家の遠い池ちゃんの方から先に送つていくことになつたのだ。

「うん、明日も朝から仕事やで。」

と、わたしは運転している太陽の横顔に視線を向けて答えた。すると、太陽は軽く口元を綻ばせて、「明日仕事やのに誘つて悪かつたな。」と、いくらか申し訳なさそうに言つた。

「べつにそんなことないで。」と、わたしは曖昧に微笑んで答えた。「太陽と池ちゃんに会つのは久しぶりやつたし。それに、明日行けばまた休みやし。」

「そつか。それやつたらいいんやけど。」と、太陽はわたしの言葉に曖昧に笑つて頷くと、それから少し間をあけて、「でもほんまになかなかみんな会われへんようになつたよな。」と、静かな口調でポツリと言つた。

「そいやなあ。」と、わたしは太陽の言葉に頷いた。
「昔は時間ならいぐらでもあつたんやけどな。」

と、太陽は軽く笑いながら言つた。

わたしは曖昧に微笑して同意した。

「といつても、いま俺は無職やから時間はあるんやけどな。」
と、太陽はそう言つてから自嘲氣味に少し笑つた。

わたしは彼の言葉に少し笑つてから、

「最近はいつも何してるの？」

と、なんとなく尋ねてみた。すると、彼は、

「今は毎日図書館に通つて本読んでるな。」

と、ちょっと照れくさそうに微笑みながら答えた。

「そうなんや。」と、わたしはちょっとびっくりして言った。彼は大学の頃、どちらかとこうと本なんてまったく読まないタイプの人間だったのだ。

「どうしたん？ 急に？」

と、わたしがいたずらっぽく笑いながら囁つと、太陽はわたしの問いにいいわけするように少し笑つて、

「せつかく時間があるんやし、この機会に本でも読んじこつかなあつて思つてな。」

と、答えた。

「そつか。」と、わたしは頷いた。

「あと、吉田の影響もあるかな。」

と、太陽は少ししてから付け足して言った。

「吉田くん？」と、わたしは少し疑問に思つて訊き返した。すると、

太陽はわたしの言葉に軽く頷いてから、

「昔、吉田が面白いって言つてた小説のこと思い出してな、それで暇だし、なんとなく読んでみようかなつて思つてな。」

「いい心がけやん。」

と、わたしがからかうように言つと、太陽は照れくさそうに曖昧笑つただけで何も言わなかつた。

夜の一時を過ぎてしまった車道にほとんどの車の姿は見られなかつた。街頭の淡いオレンジの光が寝静まつた町並みは静かに照らし

出していた。そんな雨に濡れた町並みを見つめていると、何がどうといふこともなく、少ししんみりとした気持ちになつた。冷たい雨に濡れた夜の街の光が、視界を通して心の中にすりつゝと染み込んでくるような気がした。

「」の前、春に咲く花っていう小説を読んだんやけどな。」と、しばらくしてから、太陽はふと思いついたように言つた。わたしは窓の外に向けていた視線を太陽の横顔に戻した。

太陽はわたしの顔にちらりと視線を向けると、再び視線を前方に戻しながら、「わかちゃん、雪野透子っていう作家知ってる?」と、訊いてきた。

「わからへん。」と、わたしちょと考えてから首を傾げるようにして答えた。わたしは本を読むのは嫌いではないけれど、かといって熱心な読書家ではなくて、流行の小説を読むくらいのものだったから、流行作家の名前か、もしくは古い大御所の、たとえば夏目漱石とかくらいの作家の名前しかわからなかつた。

「それって有名なひとなん?」と、わたしが試しに訊いてみると、太陽は軽く首を傾げるようにして、「いや、俺もよくわからへんねんけどな。」と、苦笑するように少し笑つて、それから、「とにかく、この前図書館にいったときに、たまたまそのひとの本を見かけて読んでみたんよ。」と、太陽は話を続けた。

「それでな、そのひとの小説がめっちゃ良くてな・・良いっていうか、考えさせられたっていうか、印象に残つたっていうかなあ・・・

「どんな話なん?」

「ど、わたしは気になつて尋ねてみた。

すると、太陽は、「一口で説明するのはちょっと難しいんやけどな。」と、少し困ったように笑つてから、物語のあらすじを簡単に話して聞かせてくれた。

太陽の話によると、その春に咲く花という小説は、戦前の日本を舞台にした小説みたいだつた。主人公は若い女の人が、その女人には敬愛するお兄さんがひとりいる。彼女のお兄さんはとても優しいひとで、美術大学で絵を学んでゐる。でも、徐々に戦況は厳しくなつていつて、やがて学生である彼女のお兄さんも徴兵されて満州の戦場に行かなければならなくなる。

彼女のお兄さんは戦場に行つてからも、妹にあててときどき手紙を送つてくれていたのだけれど、あるときからパツタリとその手紙が届かなくなつてしまつ。

主人公の女のひとは兄が死んでしまつたんぢやないかと不安に思ひながら毎日を過ごしているのだけれど、果たしてその予想は的中して、やがて彼女のもとにお兄さんが満州で戦死したという知らせが届く。

彼女はその事実を知つて、悲しみにくれるのだけれど、その悲嘆に暮れている彼女のもとに、ある日、届くはずのないお兄さんからの手紙が届く。

主人公の女のひとは兄が戦死してしまつたというのは何かの間違いで、実はまだ兄は生きていたんだと嬉しく思つて、慌ててその手紙を開封する。

でもその手紙を読んでいくうちに、それは彼女のお兄さんがまだ亡くなる以前に出した手紙だということがわかる。戦況が悪化したこととで郵便がスムーズに届かなくなり、一ヶ月以上前に出した手紙が今になつてやつと届いたのだ。

手紙には、一匣のきれいな花の絵が同封されていて、その花は、寒い満州で、春になると一番最初に咲く花だということが、手紙の文末に付け加えるように書かれてあつた。

・ 戦争が終わつてだいぶ月日が流れてから、主人公の女の人はその花を実際に見てみるために、かつてお兄さんが戦死した地方を訪ねていく・・・太陽の話によると、だいたいそんなふうなことが書かれた小説であるみたいだつた。

「・・・なんかちょっと哀しい話やな。」

と、わたしは太陽の話を聞き終わつてからそう感想を述べた。

太陽はわたしの言葉に頷くと、何かを考えるように少しの間黙つていたけれど、やがて、

「こういう物語を読むと、どうしても運命とかそういうことを考えてしまうよな。」

と、静かな口調で言った。

「運命?」と、わたしは太陽の言葉を繰り返して言った。

太陽は、「だつてな。」と、言つと、前方に視線を向けたまま言葉を続けた。「だつてな、戦前の日本に生まれてしまつたら、否応なく戦場にいかなかんやん。・・・そのお兄さんはほんとうは戦争になんて行きたくないなかつたやろうし、まだ死にたくなかつたやろうし、絵が描きたかつたやろうなあつて思うと、なんか哀しいといふか、虚しい気持ちになるな。」

そう言つた彼の表情は、街灯の淡いオレンジ色の光のせいか、少し哀しそう映つた。

「……俺たちはまだ今の日本に生まれたから、少しばら自分の未来を自分で選択していくことができるけど、たとえば、北朝鮮の貧しい家庭に生まれたひととか、アフリカの食べ物ない国に生まれたひとたちはそんなことできひんやん。ただその日その日を生きていくだけで精一杯やつたりするやん。……なんで世の中ってこんなに不平等にできるんやろ?」
「…………」

「……確かにな。」と、わたしは彼の言葉に頷いた。

「そして俺らは世の中にはそんな恵まれない環境にあるひとたちがたくさんのいるのを知ってるのに、そのひとたちのために何もしてへんやん。

べつにそのひとたちの「」がどうでもいいとは思つてへんつもりやけど、結局、究極のところでは、自分さえよければそれでいいと思つてしまつている自分がいるような気がしてしまつてな……

そのひとたちのために自分に何ができるかを考えるよりは、自分の興味のあることとか、物欲とか、そういうことばかり考えてしまつていてる自分がいてな・・それでそんなふうに考え出すと、だんだん色んなことがよくわからへんくなつてくるつていうか、自分がすぐ汚い人間のように思えてきて嫌になるな……」

わたしは黙つて太陽の言葉に耳を傾けながら、でも確かに太陽の言つとおりかもしれないな、と思つた。

そんなあからさまに自分さえよければそれでいいと思つてゐるつもりはないし、基本的にはみんなが幸せになれたらいいなと思つて

れど、でも、究極のところでは、やはり、自分さえよければ、自分にとつて身近な、親しいひとたちをえ幸せであればそれでいいと思つてしまつてゐる自分がいるよつた気がした。

わたしはひとのために何かできることをするよりは、どうやつたら自分がもうちょっと幸せになれるかとか、日々に対する不平不満だと、恋人と別れて哀しいとか、そういうことばかり考えてしまつていて、世の中の、わたしなんかよりももつともつと苦しい立場におかれひとたちことをかえりみたことなんてほとんどなかつたように思った。

そしてそのことに気がついた今この瞬間にも、そのひとたちを救うために積極的に努力していくことは思えない自分がいて、そんな自分は最低かもしけないとthought。少し後ろめたい気持ちになつた。

でも、同時に、そんな自分はどうしようとも思つた。わたしはもう、自分のことだけで精一杯なのだ。どうすればいいのか、どうするかが正しいことなのか、わたしにはよくわからなかつた。

「・・・とにかく、その小説を読んで色々考えさせられたな。」

と、わたしがぼんやり自分の思考のなかに沈んでいると、となりで太陽が話に区切りをつけるように言つた。それから、太陽は横目でちらりとわたしの顔を見ると、「全然関係ないんやけどな。」と、いくらか改まつた口調で言つた。

「その図書館の出入口にな、めっちゃ綺麗な絵が飾つてあるんよ。」と、太陽は言つた。

「花の絵でな、多分水彩画やと思つんやけど、きれいな水色の花の絵でな・・それでさつき言つた小説のせいか、めっちゃその花の絵が気になつてな。なんとなく、その花が、小説のなかにでてくる春

の花のよつな気がしてな・・・。」「

「誰か有名なひとが描いた絵なん?」

「と、わたしが尋ねてみると、太陽は、「いや、俺もよくわからへんねんけどな。」と、首を傾げるようにして答えて、「でも、小さな図書館に飾つてある絵やし、そんな有名なひとの絵じやないと思うで。」と、少し自信なさそうに答えた。

「絵の下に名前が書いてあって、たぶん女人の人やつたと思ひなが、ちよつと忘れてしまつたな。」と、太陽はそう続けて言つてから苦笑するように少し笑つた。

わたしは太陽の言葉に曖昧に笑つてから、「また今度休みの日こ、その小説と、絵を見に行つてみるわ。」と、言つた。

「うん。まあ、気が向いたら見てみてや。」と、太陽は微笑んで言った。

その日、結局、吉田くんから電話がかかって来ることはなかつた。

青色の花とその想い

中学生のときに、わたしには仲の良い、たぶん親友と呼んでもいい友達がひとりいた。その子の名前は望みちゃんといつて、わたしは望みちゃんといつも、何をするのも一緒にだった。

わたしは中学校に入つてからテニス部に入ったのだけれど、そのテニス部の監督のことがあまり好きになれなくて、半年ほどですぐにテニス部をやめてしまった。そのあとは何をするということもなぐぶらぶらしていたのだけれど、あるとき美術部に入つていた望みちゃんに楽しいから入らないかと誘われて美術部に入る」とになつた。

でも、入つた動機が不順というか、あやふやなものだったので、部活には参加したり、しなかつたりで、いつたとしても、それは美術をしにいくよりも、美術部に入つているみんなと仲が良くて、みんなと話をしにいくといつ感じだつた。

でも、望みちゃんはそんなわたしとは対照的で、毎日放課後遅くまで残つて絵を描いていて、ほんとうに絵を描くことが好きみたいだつた。

絵のことはよくわからぬけれど、わたしは望みちゃんの描く絵が好きだつた。

彼女の絵にはみんなの注目を集めのような華やかさはなかつたけれど、でも、その変わりに、ひと目見た瞬間に、心のなかにすうつ

と色彩が染み込んでくるような、たとえば夏の冷たく澄んだ川の水を思わせるような、涼やかで、透明な美しさがあった。

でも、なんとこ‘うか、その透明な美しさには、ほんの微かに、影のようなものがあつて、だからそのせいか、望みちゃんの絵を見ていると、いつもほんの少しだけ哀しい気持ちになった。まるで遠くの、淡い色合いに霞んだ情景を見ているみたいに。透明な水に、一滴の青灰色の絵の具が零れてしまったみたいに。

今でも印象的に覚えているのは、望みちゃんとふたりで自転車に乗つて、よく海を見に行つたことだ。わたしが生まれ育つた小さな町は海のすぐ近くにあつて、ときどき学校が終わつたあとや、休みの日に、ふたりで自転車に乗つて海を見に行つたりした。

防波堤沿いの道に自転車を止めて、「ゴツゴツとした岩場を歩いていつて、打ち寄せる波がすぐ田の前まで迫つてくるような大きな岩の上に上がって、じろじろとふたりで横になつた。

田を閉じると、そのとき見た空の色や、海の色が、瞼の内側に浮かびあがつてくるのだけれど、でも、どうこ‘うわけか、その空の色や、海の色は、（畠の田やくもりの田ばかりではなかたはずなのに）今にも雨が降り出しそうなどんよりとした天気のイメージで、その暗い色彩に沈んだ画面のなかで、望みちゃんはこちらの方を振り返つて、いくらか哀しそうな、何かを諦めるような微笑を浮かべている。

それはわたしが実際に過去に見た映像なのか、それともわたしの記憶が作り出したイメージに過ぎないのかはよくわからないのだけれど、でも、どうしても、望みちゃんのこと思い出すと、いつも彼女は悲しそうな表情をしていて、彼女の笑った顔や、楽しそうに

していいる表情を思い出すことはできない。

次の日の休みに、早速わたしは太陽が言っていた本と花の絵を見てるために、家の近くにある図書館まで行ってみることにした。もう雨は上がっていたけれど、雨雲はまたいつ気が変わつてもおかしくなさそうな顔をして空にどじまつていた。雨が降つても大丈夫なように、一応傘も持つていいくことにする。

太陽が言つていた花の絵は、図書館の正面玄関をちょっとわきにそれたところに、ぽつんとひとつだけ飾られてあつた。

確かに太陽が言つていたとおり、それはとてもきれいな花の絵だつた。キャンバスの中央に、目に冷たいような淡い水色の花がどちらかというと物静かに描かれてある。わたしは植物を扱う仕事をしているので、一応花の名前や種類については詳しつもりでいるのだけれど、でも、描かれている花はわたしのよく知らない種類のものだつた。

花の形からして百合の花に似てゐるような気がしたけれど、よく見てみると、百合でもなさそうだった。あるいはもしかすると、作者のまつたくの想像で描かれたものなのかもしれない。でも、とにかく、その描かれた花の絵はとても美しくて、じつと見ていると、あまりにもきれいすぎて、哀しくなつてしまつのような感覚すらあつた。

そして、絵を見ているうちにわたしがふと思い出したのは、望みちゃんの絵だった。今日の前に飾れている花の絵と、望みちゃんが

描いた絵は、どことなく似ているような気がした。そう感じてしまふのは、絵の表面全体に微か滲んでいる、淡い青色の、少し物悲しい感じのする色彩のせいなのかも知れなかつた。

絵の下に小さな紙が張つてあつて、そこに絵の題名と作者の名前が記されてあつた。「いつか雪が溶けたら 藤島静香 1979年
没 享年二十歳」

太陽の言つていた「春に咲く花」という小説はなかなか見つからなかつた。図書館に置いてある本を隅から隅まで見て回つただけれど、それでもどこに置いてあるのかわからなくて、結局諦めて図書館のひとに訊いてみることにした。

わたしが本の題名と作者の名前を告げると、図書館のひとはちょつと困惑したような表情を浮かべて、少々お待ちくださいと語りつと、カウンターの奥の方にいつてしばらくの間戻つてこなかつた。ひとつすると、題名や作者の名前を太陽から聞き間違つて覚えてしまつたのかなとわたしが不安に思ひはじめていると、やがて図書館のひとが少し息を切らせるようにしながら戻つてきた。

「すみません。お待たせしました。」と、三十代後半くらいの、小柄で、感じの良い女のひとはわたしに頭を下げる。最近図書館の本を整理したのだけれど、この本は利用者が極端に少なかつたので、図書館の書庫にしまわれることになつたのだ、と、説明した。

「いいですよ。そんな謝らなくても。」と、わたしがなんだか申し訳なくなつてそう言つと、彼女はびうざと言つて、わたしに一冊の

本を手渡してくれた。

手渡されたのは白い装丁の本だつた。結構古い本のようでカバーはついていないくて、表紙には本の題名と作者の名前だけが書かれてあつた。思つていたよりも薄い本だつたので、これだつたら普段そんなに本を読まないわたしでもなんとか読み切れそうだなと安心した。

わたしが手渡された本をしげしげと眺めていると、「それ、ちょっと哀しい話だけど、でも、いい本ですよ。」と、図書館のひとはわたしの顔を見て微笑んで言つた。わたしはありがとうございましたと彼女にお礼を言つと、その本を一冊借りて帰ることにした。

本を借りるついでに、図書館の玄関に飾られている絵のことについて訊いてみようかなと思ったのだけれど、わたしの他にも数人のお客様さんが並んでいて忙しそうだったのでやめておくことにした。

帰り間際にもう一度、わたしは改めて出入口に飾られた「いつか雪が溶けたら」という題名の花の絵を見てみた。何度見てみても、その絵はとても綺麗に感じられた。でも、綺麗だと思つると同時に、どうしても哀しみ似た感覚を感じてしまう。

この絵の作者はどうして二十歳という若さで亡くなってしまったのだろう、と、思った。病気だったのだろうか。それとも事故。わたしはふと死んだ友達のことを思い出した。

図書館を出ると、思い出したように冷たい雨がポツポツと降り始めた。

望みちゃんが死んだのは、中学校の卒業式の少し前だった。わたしも望みちゃんも進路が決まって、あとは卒業式を迎えるだけといつときだった。

勉強のできる望みちゃんは、わたしたちの住んでいた地域の中でも一番レベルの高い高校に進学が決まっていた。わたしの中学校のなかでその高校に進学するのは十人にも満たないくらいだったから、みんな望みちゃんのことをするぞいねと言って褒めていた。先生も得意顔だった。わたしもそんな勉強のできる子を友達に持つたことを誇りに思っていたし、また同時に憧れてもいた。

でも、それにもかかわらず、望みちゃんはどこか浮かない顔をしていた。浮かない顔をしているといつよりも、何か思いつめた表情を浮かべていた。

わたしは一度だけ、どうかしたの、と、望みちゃんに尋ねてみたことがある。でも、そのとき望みちゃんはいくらかぎこちなく、寂しそうに微笑んだだけで、何も語らなかつた。

これはあとになつて、望みちゃんが自殺してからわかつたことなのだけれど、望みちゃんの家は両親の仲が悪くて、そのことで望みちゃんはずつと悩んでいたみたいだった。それから望みちゃんのお母さんが、いわゆる教育ママのような感じで、ほんとうは望みちゃんは美術の勉強が専門的にできる東京の高校に進学したいと思つていたのに、それを認めないので、一番の進学校に進むことを強制したみたいだった。

わたしは望みちゃんが自殺する前日、一緒に学校から家まで帰つ

たのだけれど、そのときの望みちゃんはほんとうにいつも通りの望みちゃんで、暗いところなんかひとつもなく、むしろいつもよりもちょっと暗るく感じられるくらいで、でも、今になつて考えてみると、望みちゃんはそのときにはもう、死ぬことを決めていたのだと思ふと、哀しくなるし、どうしてわたしはそのとき望みちゃんの気持ちに気がいてあげられなかつたのだろうと悔しくなる。

望みちゃんは血色の血分の部屋で首を吊つたみたいだつた。それを見つけたのは、二つ年上のお兄ちゃんだつたみたいだ。

望みちゃんのお葬式はとてもひつそりとした寂しいお葬式だつた。お葬式の間中、小さなボリュームで望みちゃんが好きですつと聞いていた「青色の花」という歌が流れていた。その歌を歌つているのは、世間的にはまったく無名の、インディーズバンドか何かの人たちだつた。歌の内容は、暗闇のなかで希望をみつけようとする静かな歌だつた。

確かにそのとき、雨が静かに降つていたのを覚えている。三月の冷たい雨が淡々と降つていた。バスに乗つて火葬場までみんなで行つて、そのときみた火葬場の煙突と、その煙突から立ち上る、ぼんやりとした黒い煙のことが今でも忘れられない。望みちゃんのお母さんが声を上げて泣いていて、そのとなりで望みちゃんのお父さんが何度も何度も繰り返し望みちゃんに対して謝つっていた。

今になつて思えば、何も死ななくともよかつたんじゃないかつて、もつと違う選択肢だつてあつたんじゃないかつて思うのだけれど、でも、きっとそのときの望みちゃんは思いつめてしまつていて、苦しくて、冷静に何かを考えることなんてできなかつたんだろうなって思う。

だけど、確かに生れる」とせども死んでしまう、辛い。だから、少しは望みやんの気持ちもわかる気はある。これから先ずっと生きていこうと希望はあるんだろうから不安心になる気持ちはある気がするし、正直希望は必ずしもあるとは言えないのかもしれない。でも、それはでもひとは生きていかなくちゃいけないんだと思つて、だけど、ほんとうに自分はどういう思いができるのかと言つて、よくわからなくなったりもして……。

まだ、雨はやまない。

雨が本格的に降りはじめたのは、わたしが図書館から家に帰りついてすぐくらいの頃だった。川の流れる音のような激しい雨音がアパートの外に聞こえた。

お腹が空いたのでとつあえず「飯を食べる」とにする。メニューは帰りにかけにコンビニで買ったピサパンとドーナツだ。それと一緒にコーヒーを飲むことにする。

廊下に面してある小さなキッチンに立つと、銀の缶に入っているコーヒーの粉を紙のフィルターにスプーン一杯半くらいいれる。そしてそれをコーヒーメーカーにセットして、あとは水をコップ一杯ぶんくらい入れてスイッチを押す。

すると、少し間をおいてコーヒーメーカーが水を吸い込んでいく「ボボボ」という音が聞こえてきて、その後に「コーヒーメーカーから蒸気の吹き出る音とともにガラス瓶に抽出されたコーヒーが静かにたまつていぐ。

コーヒーのいい香りが部屋のなかに充満した頃くらいにコーヒーは出来上がって、それを昔から使っているお気に入りのマグカップに注いで部屋の方に持る。

出来上がったコーヒーは大変よくできましたという感じで、美味しいコーヒーを飲んでみると、少しだけ、嫌なことや、寂しい気持

ちを忘れて、ほっとくつらいだ気持ちになれる気がする。

ヴォランダの外に視線を向けると、青と黒を混ぜ合わせてそれを薄めたような色彩をした空間に、雨がくつきりとした白い線になつていくつも走つているのが見えた。

わたしはそんな外の景色と雨音を聞きながら、買ってきましたパンを口に運んでいたけれど、なんだかやつぱり音がないと落ち着かないといこうか、心細いような気持ちになつて、何か音楽をかけることにした。

とりあえずという感じでMDラジカセのプレイボタンを押すと、ながれはじめたのは、ずっと前にかよちゃんに借りてMDにダビイングした小野リサのホザノバだつた。最近家でゆっくりするということがあまりないので、以前聞いていたMDがそのままになつているということが多いのだけれど、でも、コーヒーを飲むのにボサノバのゆつたした落ち着いた感じの音楽はちょうどいい感だつた。心持さつきよりもコーヒーもパンも美味しくなつたように感じられる。

昼食を食べ終えると、わたしは早速借りてきた本を読んでみることにした。本のどこかにこの本の作者の、雪野透子というひとのプロフィールのようなものが載つていないだろうかと思つて見てみたのだけれど、どこにも作者に関する情報は記されていなかつた。

このひとはまだ生きているのだろうか、それとももうずっと昔に亡くなつてしまつたのだろうか、ひょっとするともしかしてこの本の作者はあの図書館に飾られてあつた、あの絵の作者なんじやないかと変なふうに想像が膨らんで、たぶんそんなことはないだろうと思うのだけれど、でも、なんとなく図書館に飾られていた花の絵と、太陽から聞いた物語のイメージが重なつて、あるいはもしかすると

なんていうふうに考えているうちに、唐突に鞆のなかに入れっぱなししていたケー タイ電話が鳴ったのでわたしの思考は中断された。

慌てて鞆のながらケータイを取り出して着信を確かめてみると、それは吉田くんからの電話で、わたしが通話ボタンを押すと、耳元に懐かしい吉田くんの声が広がった。

「もしもし。わかちゃん？」と、吉田くんは言った。
「もしもし。」と、わたしは言った。

「久しぶり。」と、吉田くんは言った。
「久しぶり。」と、わたしも答えた。この前吉田くんが電話に出なかつたとき、もしかして吉田くんに何かあつたのかもしれないと思つけもなく不安になつたけれど、でも、なんでもなかつたのだと思つてわたしは安心した。

「こ」の前、電話くれたみたいだけ?」

「うん。」と、わたしは頷いた。「この前な、久しぶりに太陽と池ちゃんと遊んでん。それでな、なんか急に吉田くんに電話してみようって話になつてな。」

「そりなんや。」と、吉田くんはわたしのしゃべり方にひられて関西弁なつて頷いた。そしてそれから、「じめん。そのとき風邪ひいてずっと寝込んでたから。」
と、いぐりか申し訳なさそうに言った。

やう言われてみると、吉田くんの声はなんとなく枯れていのつにも感じられた。

「大丈夫なん?」と、わたしが訊くと、吉田くんは、なんとか、と答えて、苦笑するように少し笑つた。

「ひとり暮らしだから、風邪ひくとほんと最悪なんだよね。全部自分でやらなきゃいけないから。それに今回の風邪はちょっとひどくて。一二三日何もできなかつた。」

「そつか。大変やなあ。」と、わたしは頷いた。わたしも一人暮らしをしているから、一人暮らしで風邪をひいたときの辛さはよくわかるような気がした。

「誰かおらんの？」

「誰かつて？」

「風邪ひいたときに面倒みてくれるよいなひと。」

「・・・残念ながら。」

吉田くんはそう答えると、自嘲気味に少し笑った。
「そつか。」と、わたしは曖昧に笑って頷いてから、
「誰か好きなひととかおらんの？」と、訊ねてみた。

すると、少し間があつて、

「・・・いないこともないんだけど、まあ、なんか色々上手くいかなくて。」

と、吉田くんは歯切れの悪い答えた方をした。

「色々つて？」と、わたしが気になつて続けて尋ねると、
「色々だよ。」と、吉田くんは照れ臭いのか、答えたくないのか、
濁すような返事をした。「いいなつて思うひとにはもう他に好きな
ひとがいたりとかね。」

「・・・そつか。」と、わたしは頷いた。わたしが何て答えようと頭
のなかで言葉を探していると、「それより、わかちゃんはもう大丈
夫なの？」と、今度は吉田くんが尋ねてきた。

「大丈夫つて？」と、わたしは吉田くんの言葉の意味がわかりなが
らも尋ね返した。

「・・・加藤くんのこと。」

と、吉田くんはわたしに遠慮するより少し間をあけてから言った。

「やれやつたら、もう大丈夫やで。」と、わたしはかよひやんのと
きと回じ台詞を口にした。「最初は長い付き合いでいたし、すくべ
感情が乱れてしまつたときもあつたけど、でも今は大丈夫。だいぶ
落ちついてきた。」

「・・そつか。」と、吉田くんはざいづの言つたらここのかわからな
のか曖昧に頷いた。それから、「でも、とにかく、元気だしね。」
と、続けて言つた。「何もしてあげられないけど、話聞くぐらいだ
つたらできると思つし。」

「・・ありがと。」と、わたしは吉田くんの言葉に答えた。でも
そう答えたわたしの声は、変なふうに震えてしまつた。ひとに優し
くされると嬉しこのに、声が、哀しみを含んでしまつのはざいづ
なんだろ?と思つ。

少しの沈黙があつて、その沈黙のなかに外に降る雨音が静かに広
がつていつた。

「・・最近はざいづ?」と、わたしは訊ねてみた。
「ざいづ?」

「小説。書いてるの?」

「・・うん。」と、吉田くんは頷いた。「ぼちぼち書いてるよ。」

「ほら、前、賞取つたつて言つてたやん。あれから何か進展はあつ
たん? 原稿の執筆依頼が来るとか?」

「・・いや、そういうのはまだないけど。」

吉田くんはわたしの問いかによつと困つたよつて軽く笑つてから、
「賞取つたつて言つても地方の小さな賞だからね。それが直接何か
に繋がるわけじゃないから・・・。」

「そつか。」と、わたしは頷いた。「やっぱり色々難しいんやね。」

わたしはそう答えるながら、少し余計なことを記してしまったかなと後悔した。

「でも、小説は書いてるんでしょ？」と、わたしは続けて尋ねてみた。

「うん。」と、吉田くんは頷いた。

「今はどんな話を書いてるの？」

「ん？えーとね、口で説明するのはちょっと難しいんだけど、花の話を書いてるよ。わかちゃんがモデルなんだけど。」

「そうなんや。」と、わたしは少し笑つて頷いた。

「自分がモデルなんてちょっと恥ずかしいな。」

「大丈夫だよ。悪いふうには書かないから。」

吉田くんもわたしの笑い声に誘われるように少し笑つて言った。

わたしはふと大学生の頃のことを思い出した。街を歩いていたらばったり吉田くんとでくわして、そのあと繁華街から少し離れた場所にある、落ち着いて話せる小さな喫茶店に入つてふたりで話をしたことがあった。そのとき、吉田くんはこれから書こうとしている小説の話をしてくれて、わたしはその小説が完成したら見せて欲しいと言つて・・一体あれからどれくらいの歳月が流れたのだろうとふと思つた。あのときからずいぶんたくさんの月日が流れてしまったように思えた。

「・・・小説できたら、また読ませてな。」と、わたしは言つた。

「・・うん、またできたら、ぜひ。」と、吉田くんは頷いた。

「・・・そつちは雨降つてる？」と、わたしはなんとなく尋ねてみた。

「・・・降つてるけど、なんで？」

「いや、べつに。訊いてみただけ。」と、わたしは軽く笑つて答えた。「こちちは今すごい雨降つてるから。」

「・・・雨、止むといいね。」と、吉田くんは言つた。
「せうやな。」と、わたしは頷いた。

吉田くんと電話したあとしばらくしてから雨はだいぶ小降りになつてきただけれど、それでもまだ雨は淡々と静かに降り続けてなかなか降り止みそうになかった。

わたしはふと心配になつてベランダの外に出てみた。ベランダで育てている朝顔が雨で駄目になつてしまつているんじゃないかと不安になつたのだ。

朝顔の芽はベランダの隅の方で雨にずぶ濡れになつていた。きっと氣のせいなのだろうけれど、その朝顔の小さな芽は冷たい雨に打たれて寒さに震えているようにも思えた。わたしは心のなかで気がついてあげられなくてごめんねと謝りながら、彼女を比較的に雨に濡れない場所に移動させてやつた。

それからわたしはベランダの手すりにもたれかかるようにして、目の前に広がる暗い色をした空を見つめた。いくらか小ぶりになつてきたとはいえたままだ降りしきる雨がわたしの衣服を冷たく湿らせていった。けれど、構わずそのままでいた。

思考のなかにとりとめもなく様々な想いが泡のように浮かびあがつては消えていった。それはたとえば明日の仕事のことだったり、別れた恋人のことだったり、望みちゃんのことだったりした。それ

らの想いはちよつび世界の、濃い青色に、ほんのわずかに黒色を溶かしたような色素に染まつていった。田に冷たいような、哀しいような色彩に。

そしてわたしはふいに吉田くんの言葉を思い出した。彼が電話を切る際に口にしていた言葉。雨止むといいねという言葉。それは希望に向かつて解き放たれたさやかな祈りの言葉のよひにわたしには感じられた。

ほんとうに雨が止んだらしいな、と、わたしは願つよつと
思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7815c/>

まだ、雨はやまなくて。

2010年10月10日06時17分発行